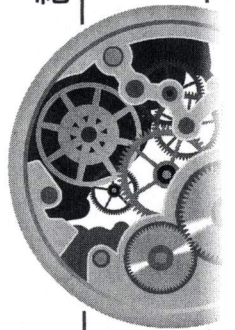


越境精神

小長谷 有紀



梅棹忠夫の残したもの

13

暗黒のかなたの光明

去る7月22日、大阪堂島浜にある社団法人クラブ関西で、第26回大同生命地域研究賞の贈呈式が行われた。この贈呈は、公益財団法人・大同生命国際文化基金の実施するメセナ活動の1つである。国際相互理解に貢献する諸研究や諸活動を顕彰することによって、国際化に貢献することを目的とした事業である。

梅棹忠夫は、この地域研究賞の第1回受賞者であった。「千里ぐらし」(講談社)によれば、「賞に縁がうすかった」と思っていた梅棹が、最初にもらったのは1980年の第1回国際文化デザイン大賞である。その後、1987年、フランスのパルム・アカデミック勲章コマンドゥール章や1994年の文化勲章など、多くの栄誉を得たが、第1回の受賞となれば多くはない。本賞は梅棹から始まった、世界を知るための賞なのである。

今年度は龍谷大学現代インド研究センター、センター長の長崎暢子さんが受賞された。また奨励賞として、オーストラリアのアボリジニを研究してきた神戸大学大学

愉しんで未来を変える



稲ワラを利用して通気性と断熱性を高めたモデルハウスを紹介する藤村靖之さん(中央)＝栃木県那須町

院教授の窪田幸子さんと、ポル・ポスト時代以降のカンボジア農村社会を研究する京都大学東南アジア

研究所の小林知さんが受賞した。さらにまた、研究ばかりでなく実践的な活動等を対象とする特別賞は、非電化工房代表の藤村靖之さんに授与された。

藤村さんは、「子息の喘息をきつかけに、健康と環境の関係を認識するようになり、イオン式空気清浄機を開発した。以来、必要以上に電気に依存している現代社会を見直し、さまざまな発明に取り組んだ。また発明塾を開催して起業家の育成に努めてきた。

そうした活動域は海外にも広がっている。例えば、モンゴルの草原部では夏でもヒツジ肉を食べるような生活様式に変化して冷蔵庫の需要が高まっているので、放射冷却を用いた安価な非電化冷蔵庫を開発した。

発明塾OBの起業家の1人は今夏、羊毛を断熱材として加工する工場をモンゴル第2の都市ダルハンに建設する。カシミアに比べて価値が低くなり、放棄同然の羊毛を活用する商品開発である。しかも、グラスウールに代わって、環境と健康にやさしい建設資材となるだろう。

藤村さんやその仲間たちの、発明起業家の心構えは「いいことで愉しく稼ぐこと」。専門的な知識を学び、これを活用して、愉しいことに取り組み、未来を変えていく。これこそまさに、梅棹が「暗黒のかなたの光明」として期待していた、思考様式である。プロかアマかにかかわらず、知的好奇心の使い方として理想的であると梅棹が見なしていた、風流の精神である。(国立民族学博物館教授)